

〈正解〉がない面白さ 黒岩剛仁

ここ数か月、東京歌会を欠席してしまっている私だが、梅雨の晴れ間の土曜日、宮崎歌会にお邪魔して、伊藤一彦や大口玲子列席の歌会を楽しんできた（都井岬に連れて行って頂いた日曜日が残念ながら土砂降りだったのは、雨男である私の所為か……）。

・ 五十分の試験監督視覚より聴覚研ぎ澄まされてくる 熊田新子
この歌について、「試験監督をしていて、カンニングをする者がいないか、じっと目を凝らしていたのだが、あまりの静寂のため、聴覚の方に感覚が移ったことを詠んでいるのだろう」との意見が出された。それに対して、教員をされている別の出席者より、「試験中って、字を書く音や紙をめくる音が聞こえて、ただ静寂なわけではない」との発言があった。双方を承けての伊藤の見解は、「視覚より」が不要なのでは、というものだった。確かに、その方が、静かな空間に響く、鉛筆や紙の音、生徒たちの咳払いなどが聞こえるようで、よりシャープな感じがする。
・ 泣き叫ぶ子を眺めつつ飲むビールけだるい午後の初夏の木陰で

横山文香

ここに詠まれている「子」は、自分の子だろうか。他人の子だろうか、ということが話題になった。「自分の子なのだとしたら、なんといい加減な親だろう」と言う人がいた。私は、このビール

はあまり美味しそうではありませんね、と笑わせた上で、「眺めつつ」という突き放し方からすると、自分とは関係のない子どもなのだろうが、今ならこんな親もいますよね、と述べた。因みに、後で分かった作者は独身女性だった。

何を言いたいかと言うと、短歌作品を読むという場において、〈正解〉なるものがあるわけではない、ということである。歌会には、たまたま作者本人がいるので、その歌を詠んだときの状況はどうだったのか、どんな想いを歌に込めたのか、などと思わず訊いてしまいそうになるが、作者がどう語ろうと、それは決して〈正解〉ではあり得ない。要は、そこに提出されているテキストを読者としてどう読み解くかであり、〈正解〉がないからこそ面白い、のではないだろうか。

このところ、〈生徒らが校歌うたはぬゆゑよしを知るか同じ理由に唄はざるのみ〉という小池光歌集『静物』の歌をめぐる、その一首をある文章中で取り上げた彦坂美喜子と、誤読を指摘する私信を送った小池とのやりとりが話題になったり、〈自動販売機とばあさんのたばこ屋が自動販売機と自動販売機とばあさん〉という斎藤斎藤の作品について、「短歌研究」誌上で千々和久幸と斎藤本人とのやりとりがあったり、というように、作者本人がしゃしゃり出てくる場面を目にするのだが、何とも見苦しい感じがしてしまうのだ。

私は、「作品は誤読されるのがあたりまえであって、それを受け入れる用意のない作者は作品を公にしないほうがいい。私はこう考える。ただし、魅力的な反論に説得される用意はある」との都築直子の意見（『短歌研究』五月号）に賛成である。